



TITLE:

<批評・紹介>東洋美術史研究 濱
田耕作著

AUTHOR(S):

岡田, 芳三郎

CITATION:

岡田, 芳三郎. <批評・紹介>東洋美術史研究 濱田耕作著. 東洋史研究
1943, 8(1): 54-55

ISSUE DATE:

1943-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145776>

RIGHT:

批評・紹介

東洋美術史研究

濱田耕作著

昭和十七年九月

座右寶刊行會發行

A5判四六〇頁

定價七圓五十錢

「考古學研究」「日本美術史研究」に次いで、故濱田先生第三の論文集として今又本書が公にさるゝに至つた。この三部作を机上に並べてつくづくと見入る時、單に考古學者として内外に偉大な足跡を残されたばかりでなく、又美術史家として、我國啓蒙期の學界に大きな貢獻をなされた故先生の、學的御生涯を今更の如くに思ひ、又親しく教壇に仰いだ先生の御風姿や、さては御音聲などの思ひ出と共に、先生の、廣く豊かであられた御性格と、もとよりそれと一體である先生の御學風を、又今この篇に讀んで感慨の新たなものを覺える。

勿論美術史にも色々な立場があらう。蓋し先生は御自分で、「命題の意義を詮議することに多くの興味を持たない部類の間である。」と言つて居られる様に、理窟つばいことは特にきらはれた。従つて先生の論文では、徒らに詮索的な細かい仕事や、抽象的な理論ではなくて、最も具體的な事實そのものが、常に私共を教へ導いて行く。その爲めに私などは先生獨特の美文に乗せられて、ついつい輕率に坦々と走つてしまふばかりなのであるが、然しと云つて先生は一部の美術史家の様に決していたづらな歎美主義者などではない、坦々たり平明たるうちに、單に物を游離した一片としてでなく、廣く材料を見渡し大局から

しつかりとつかむ事、又さうすることによつて材料を生かす事を常に教へられるのである。

本書に收むる「ギリシヤ美術の東漸について」の一篇は先生の大學卒業論文であるが、既に我々は先生のかうした學風の典型をそこに見ることが出来る。そして他の二十二篇も、序文中に池内宏博士が「濱田君は早く學生時代から希臘藝術、殊にその東漸の歴史について深い興味を有つてゐた……思ふにこの問題は君の生涯を通じて腦裡を離れることのなかつた研究の對象であつたのであらう」と述べられてゐる如く、大きくはすべてが皆このテーマに歸するものと嘗つてよく、そこに私は故先生の東亞美術に對する廣い見方をうかがふことが出来ると思ふ。

そして本書では前記論文の外に、「犍陀羅彫刻と六朝の泥像」「アフガニスタンの佛頭」の二篇が直接にこの問題を取り上げられたものとなつてゐるが、なほこれに先立つて、支那本來の美術としての「漢代の繪畫について」「威璧考」の二篇が卷頭に收められてあり、又右の三篇に續いては單に我が國古美術の精華たるのみならず、六朝美術の一大記念碑たり、東亞美術の寶庫たる法隆寺をめぐる、右の大きな見地からする客觀的科學的な考察が行はれてゐる。即ち、先づ「遼西義縣の石窟寺」

「法隆寺の建築様式と支那漢六朝の建築様式に就いて」「法隆寺の金堂と六朝の石窟寺」「支那六朝の石窟寺と法隆寺の塔」の四篇に於いては、六朝様式をうけた法隆寺の東亞美術史に於ける位置を石窟寺との關係に於て考へ、續く十篇にては法隆寺の釋迦三尊、藥師如來、四天王、百濟觀音、玉虫厨子、壁畫と寺寶

のそれぞれに及んでゐる。

* *

なほ本書卷末には附録として「東亞古代美術綜説」一篇が加へられてゐるが、これは總長となられるまで二年間に亘り續けられた先生最後の、我々には最も思出深い講義の草稿である。

それは先生の廣い學の見地から、それまでの個々の研究が要約大觀せられたものであるが、總括的にして且客觀的ならん事を期せられる先生の御意圖がこゝではいよいようかがはれ、支那古代の彩色土器より玉器、銅器、スキタイ文物の影響、更に漢代の彫刻繪畫に及び、又佛教傳來前後の美術に關する諸章は本文二十三篇の諸論攷を補ひ、それらの占める全體の意味もこゝに益々明かとなる次第である。

類書の少い支那古代美術について、先生のこの御遺稿の如きが公にされた事は後學にとつて大きな幸ひであると云はなければならぬ。

〔岡田芳三郎〕

支那佛教史研究

(北魏篇)

塚本善隆著

昭和十七年十月

弘文堂書房發行

A5 判本文六五四頁索引二八頁 定價拾圓

昨年秋、殆んど時を同じくして、支那佛教史關係の著作二つが學界に提供された。一つはこゝに紹介せんとするもの、今一つは山崎宏氏の勞作「支那中世佛教の展開」である。後者に就ても、いづれ紹介の筆をとりたいと思つてゐるが、在來の支那佛教史關係の著作と頗るおもむきを異にしてゐることは二者に共通すること、このことは、そのまゝ、斯學研究の躍進を意味するものでなくてはならぬ。而して、支那佛教史研究の最近に、

於ける急速な進展は、一般史學の潮流に即して、一般史への認識を背景に、教團史の事象が解明され、併せて教理方面にも歴史的現實に即した研究が進められたが爲めに外ならぬ。

著者塚本氏は、支那佛教史研究のかうした發展過程にあつて、眞摯な學的態度と鋭敏な感覺を以て、一文を草する毎に、必ず新分野を開拓し、斯學の動向に先鞭を著けられつゝある。

さて、本書は氏の研究に於て重要部分を占むる北魏佛教に關する論作十篇を集めたもの、うちに未發表 篇を含むも、他は既發表のもので、斯學研究の驥尾に附く筆者にとつては、いづれも再讀三讀、以て多くの示唆指導を得たなじみ深い論作ではあるが、かうして一冊にまとめられると新たな學の靄氣を感じるや切である。

(一)「魏晉佛教の展開……序説とも云ふべき一篇、支那の佛教受容の様相を發展的過程に於て把握されてゐる。即ち、後漢の神仙方術的佛教が、魏晉時代古典の學を生命とする貴族社會に受容されて、道家的佛教・格義的佛教と展開し、然もそれがやがて漢族僧道安によつて、佛教は佛教として理解し實踐すべきであると云ふ本然の立場への自覺反省となつて來たことを、西方からの佛教諸思想の傳入と睨みあはせつゝ明快な論理を以て證明されてゐる。北魏國家の先蹤たる五胡の諸國に於ける問題が、充分論じられてゐない憾みはあるが、佛教の展開を支那思想・支那社會の潮流に合して把握せんとする筆者の意圖は明瞭に認められる。(二)「北魏建國時代の佛教政策と河北の佛教」……これより本論には入ると云ふべく、文中、胡族國家たる北魏が北支那に勢力を伸張し行く線に沿つて、同國內の佛